

質問

5年前に胃がんの手術を受けた57歳の母親が、2年前に肺がん転移が見つかり、がんの進行を抑えることを目標に抗がん剤治療を受けてきましたが、1週間前から食事ができなくなり、自分でトイレに行けなくなり、担当医から「抗がん剤治療をこれ以上続けても治療自体がかわって母親の状態を悪くする。緩和ケア中心の治療を考えた方がよいのではないか」と説明がありました。悩みましたが、母親の「家で家族と過ごしたい」という願いを大切にしようと思います。母親や家族が安心して在宅で過ごすには、具体的にどのような準備が必要なのでしょうか。

(47歳女性)

がん何でもQ&A

答え

「もう治らない」とことを受け入れるのは、とても大切なことだと思います。がんの治療が難しくなっても、それは何もできないということではありません。痛みや吐き気、食欲不振、だるさ、気分の落ち込み、孤独感を



武知 浩和

徳島大学病院食道乳腺  
甲状腺外科医師

在宅療養どうすれば

弊するまで、自分らしさを保つこと、生活スタイルを確保すること。無理のない範囲で、これからの治療と療養生活について考えていきましょう。私は外科診療に当たって、「がん緩和・こころのケア部門」の業務にも携わっており、具体的には、鎮痛など身体症状の緩和や、精神療養の専門スタッフと連携して精神症状の緩和に努めています。

お母さまの在宅療養に向けて心配されるお気持ちは非常によく分かります。私たちは、進行がん患者の在宅療養の支援にも力を入れていますが、皆さん、同様の不安を抱えておられるようです。

相談を受けた際には、地域医療連携センターのスタッフ（看護師、医療ソーシャルワーカー）と連携して、次のような方

法を進めています。在宅療養を支援してくれる医師、訪問看護スタッフを確保して依頼する。当院でできる限り症状を緩和し、在宅療養の継続が困難な状況になった場合に備えて入院先を確保しておく。お母さまの希望を尊重し、在宅療養の準備を進めたい。この場合は、病状や家族の経済状況により、一時的にはあっても入院の必要性が生ずる場合が想定される。特無床診療所の医師に支援をお願いした際には、入院できる病室を確保しておくことが、患者サイド、医療従事者サイドにも安心感につながる。在宅療養は、なにかいかに在宅で過ごすための準備が大切だ。



支援医師や入院先確保

質問者 がんに関する悩み「徳島がん対策センター」が抱えています。質問内容を詳しく書き、住所、氏名、年齢、性別、電話番号を明記し、「〒770-8572 徳島新聞社文化部」が相談一係へ、紙上に住所、氏名、電話番号は掲載しません。同センターへ電話088(666)9448でも平日午前9時～午後5時に受け付けています。

考慮し、できる限りニーズに応える努力をしております。まずは担当の医師に相談することから始めてみてはいかがでしょうか。

最後になりますが、がん治療を受ける際には、地域のかかりつけ医で日頃の診療を受け、がん診療連携拠点病院では専門的な治療を受けるという、いわゆる「主治医の役割」が今以上に国民の皆さまに浸透することが理想的で、できる限り自宅で生活するために必要なことであると考えております。

なお、徳島市医師会では「在宅緩和ケアネットワーク」を設立し、かかりつけ医がいなくても困りのがん患者や家族に対して、在宅療養支援診療所を紹介するなどの在宅緩和医療に対応していただいておりますので、ぜひ相談してみてください。